



## episode 31 祖母の介護に奔走する母と、小学生の私2人だけの穏やかな時間

投稿者 真鍋 萌 さま(福岡県)

私が幼い頃、いつも布団に入って絵本の読み聞かせをしてくれたのは母だった。  
私の両親は書店員をしていて、リビングには3台の本棚に敷き詰められた、たくさんの本があった。  
その中から毎晩、一冊の絵本を選び取り、母の柔らかな声の中で眠りにつくのが私の日課だった。  
ときには、母のほうがか早く寝落ちしてしまい、「もう、まだ終わってないよ」と起こすこともしばしば。

小学生に上がった頃、母は祖母の介護を始めた。  
私が起きないうちにそっと家を出て、片道1時間かけて祖母の待つ家に行き、昼食を作り、薬を飲ませ、  
排泄介助を済ませ、夕食を冷蔵庫に入れ、また片道1時間かけて帰路につく。  
その後、父と私の夕食を作り、食卓を囲む。睡眠を取ったら、また早朝に祖母の家へと向かう。  
そのため、母に代わって、父が慣れないながら私の朝食を作り、髪を結い、宿題を確認し、登校を見送る。  
そんな日々だった。

休みなどなかったにもかかわらず、その大半は、一緒に布団に入り、読み聞かせをしてくれたと記憶している。  
母は、私が生まれてからは専業主婦だったため、母が祖母の介護に通うまでは、家にはいつも母がいた。  
一人っ子だった私は、家に母がいないことが寂しかったのだと思う。  
その分、布団の中でのあたたかな、穏やかな、母子2人だけの時間が大好きだった。

そんな母が、特に気に入っていた絵本が、この『手ぶくろを買いに』だ。  
この本を持っていくと、いつも「この絵が好きなのよね」と微笑んでくれた。  
そして、読み終えると必ず、母狐が子ぎつねにしていたように、私を抱きしめてくれた。  
起きたら母がいないことも、その瞬間は忘れ、安心して眠りにつくことができた。



『手ぶくろを買いに』  
新美南吉 作 黒井 健 絵  
偕成社 1988年

あの日々から25年。私も大人になって、やっとあの頃の母の大変さや苦労が、少しは分かるようになってきた。  
その話題になる度に母は、「ストレスであんたに辛く当たることもあった」と話す。でも覚えていない。  
私は、読み聞かせのあの穏やかな時間で、たくさんの愛をもらっていたから。

「絵本の日アワードin FUKUOKA 2024」投稿作品より



本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。  
さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本のある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。



## 教科書掲載70年の国民的文学

『手ぶくろを買いに』は、『ごんぎつね』と並んで新美南吉童話の代表作として、子どもから大人に至る全世代に親しまれています。1954年に小学校国語科教科書に掲載されて以来、2002年を除く70年もの間、時代を超えて子どもたちに「生きる力」を問いかけ続けているのです。

『ごんぎつね』が悲劇的なお話と捉えられる一方で、『手ぶくろを買いに』はハラハラドキドキの体験を経てホッとする物語です。後年、瀬田貞二氏が提唱した「行きて帰りし物語」そのものです。

令和の現代でも親しまれている童話ですが、その母親像が批判的となった時代があります。母狐が自己の体験から人間への恐怖をもって足が動かなかった人間の町へ、子狐を一人で行かせたことが問題視されたのです。母親失格の指摘まで受け、教育者を中心に批評が加熱しました。

論点は、物語上の母親像に留まらず、作者の生い立ちにまで言及され、当人不在にあって、作者の心の中で憶測した論評が相次いで発せられたのでした。



## 「母恋童話」か、「成長譚」か

新美南吉氏は、1913(大正2)年、現在の愛知県半田市に生まれました。4歳で実母を亡くし、5歳のときに新しい母と暮らしはじめると、一年足らずで弟ができ、8歳で養子に出されるも祖母と折り合いが合わずに出戻るという幼少体験をもちます。

南吉童話研究者のひとりである北吉郎氏は、その本質を「母恋い童話」と言います。「幼少時代からの、未だ満たされずにきた、他者との結びつきにおける最大の空白、すなわち飢餓感(失われた母の愛のぬくもりや安らぎ感)は、生存事態をさえ危機に陥れるほどの欠落感(寂しさ)として南吉を襲い、空想世界での『母恋い』童話として文学作品上に実現されていった」と述べています。

また、その生い立ちから、継母との溝を論ずる説もあります。故に、実母への悲哀と、継母による母親像が、「矛盾」を生んでいるなどと指摘されているのです。

光村図書の『学習指導書』(1986)で位置づけられたのは、「『子ぎつねを町まで一人で行かせた』を含む一連の出来事は、母ぎつねの人間観を変えていった伏線」でした。つまり、表面上の矛盾を解決するための問題意識をもつことで読解につなげているのです。一読した「矛盾」は、創作の技法だったとするものです。



## 物語の力を90年前の創作物にみる

1931(昭和6)年、18歳のときに執筆した「権狐」の2年後に、「手袋を買いに」は創作されました。原稿に、1933年12月26日と記されているのです。しかし、生前はどこにも発表することなく、本作が世に出たのは、作者が亡くなって半年後のことでした。1943年9月10日に出版された第二童話集『牛をつないだ樁の木』(巽聖歌編集、大和書店)の一編として掲載されたのです。

「権狐」を雑誌「赤い鳥」に投稿したとき、実は鈴木三重吉氏によって、子ども向けとして大幅に添削されたのです。この経験があって南吉氏は、幼年童話の「物語性」に磨きがかけれ、「手袋を買いに」で実を結んだと児童文学研究者の谷悦子氏は説いています。すなわち、「手袋を買いに」の初稿創作から十年ほど手元において推敲を続け、実現させたのです。創作の日付は、作品のイメージが閃いた西暦年月日を記したとされています。

しかし南吉氏は、この童話集を手にすることなく、1943年3月22日に他界したのでした。奇しくも最愛の母と同じ29歳という若さで、母と同じ結核にいのちを絶たれたのです。作者が没して82年経っても、その物語はイキイキと躍動しています。

### 文献

- 1) 北 吉郎：新美南吉童話の本質と世界，東京，双葉社出版，p.13-73, 2002.
- 2) 谷 悦子：新美南吉の詩と童話，大阪，和泉書院，p.135-145, 2023.